

学生から会社内での戦力への切り替え方法

学校時代と会社生活の倫理上の違い

学校生活では、考え方が正しいこと、考える過程を重視する、信条倫理が支配している。しかし、会社生活では、結果に対する責任を負う必要があり、責任倫理が重要になる。学問世界の推論は、ユークリッド幾何学などの定義と公理を決めて、そこから決められた規則に従って推論することを重視する。このような論理性を持たない人間は、学問の世界で生きていくことは難しい。一方、会社生活の場合には、結果に責任が持てて説得力があれば、より曖昧な類推などでも、論理的な考えと評価される。

総合的な視野と理想的条件での思考

学問的な議論では、部分的に切り取ったり、理想的な状況を想定したりして、きちんとした議論を展開することが重視されるが、会社生活では現実的な状況に対して、総合的な視点で検討することが重要である。

物理学で使う、大きさのない質点や、理想気体などの概念は、多くの成果を生み出した。しかし現実の問題解決には、現存する物の複雑さに正面から向き合って、総合的な視点で考えることが必要である。

昔の物理学の参考書に、「野球でいう重いボールはありえない」と偉い先生が書いていた。確かに、質点で考えれば、重いボールはありえない。しかし実際のボールの構造、バットとボールの接触状況を考えると、表面の滑り具合や回転などを考慮すれば、「重い」「軽い」という感触は十分あり得ることである。ここまで考えることが現実の世界での解決につながる。

政治家の世界で保守と革新

このような会社の考え方は、政治における保守と革新の姿勢の違いと対比するとよくわかる。まず革新勢力というものは、現状を否定し新しいものを提供する立場である。そのためには、理論的な検討から、良いというものを描き、それを実現しようとする発想が有力である。マルクスの論理に従い、共産主義や社会主義の国を作ろうとするのが革新勢力の一つのパターンであった。彼らは、正しい信念に基づく行為を重視する、信条倫理に従っている。

一方、保守勢力というものは、現状にあるものを取りあえず肯定しながら、段階的に改善を積み重ねようとする考えである。保守においても、現状に固執するのではなく、良いものは取り入れ、悪いものは直そうとする。しかし彼らは、責任倫理を重視し、失敗のできるだけ少ない手堅い形で進めようとする。

なお、革新勢力は一応社会の全体像を作ろうとするが、それがいない場合には単なる評論家になる。一方、保守においても現状に執着するだけで、改善への努力を怠れば守旧利権屋に墮落する。

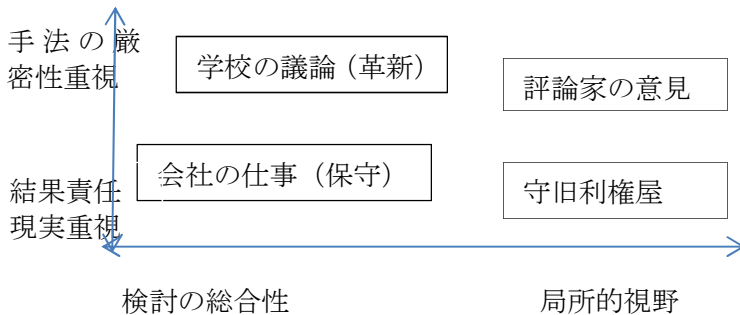


図1 政治の世界での保守と革新

この図式で見れば、学校の議論が革新的な政治家の動きに近く、会社の仕事が保守的な政治家の動きに近いことが理解できると思う。結果責任を重く考えるなら、総合的な影響を考えた上での進歩改革となる。理論的に良いものと言っても、現実の複雑性に本当に対応できる可能性を示さないと新しいものにはなかなか手を出しにくい。

学問的知識を会社で生かすための条件

学問的な知識を、会社生活で生かすための第一歩は、まずは発生している事象に対する説明である。現在にあるもの、発生していることについて、因果関係などで説明する。さらに将来の予測を行う。このような形で、学問的知識を、既存の存在物の図式の中で活用することを考える。これが第一歩である。

そして、理論的知識により、次に起こることを予測し、それがある程度当たるならば、学問的知識が本当に使えると、会社中でも認められるようになる。このためにも、思考実験のできるモデルが重要である。

新しいものを提案するための条件

学問的知識から、新しいものを提案するときには、既存の総合的な図式に対する局所的な修正として提案するか、自分で全体像を描く必要がある。そのためには、複数の理論を合成し、現実の経験と整合性をとり、ある部分では近似を使って妥協もしながら、実用的なモデルに作り上げていく必要がある。

具体的なモデル作りは、まず「保守的」な姿勢で行うことから始めるとよい。とりあえず、現状に存在するものを記述してみる。舞台を設定し。そこに登場する人と物を記述し、典型的な動きを頭の中で動かしてみる。そうすると、不足する物や関係する人が見えてくるので追記していく。

そしてできたモデルの上で、理論の適用を試みる。自分の知識で、使えそうなものを探し、それをモデル上の動作や関係に当てはめてみる。そのためには、適宜、登場者や物を抽象化し一般化する。こうしていくと、隠れた関係や機能が理論的検討過程に出てくることもある。こうしてモデルを強化していく。

そして強化したモデル上でまたいろいろな動作をシミュレーションしてみる。ここでまた、不足するものがあれば、登場者や物を追加していく。この繰り返しが収束すると、とりあえず安定したモデルとなる。

次にこのモデルの上で、色々な予測ができないか試してみる。このために必要なものが増えたら、またモデルを追加していく。一方、あまり使わないものは、適宜省略していく。その作業中に、抽象のレベルを変化させ、統一していくことで、モデルは一層使いやすくなる。

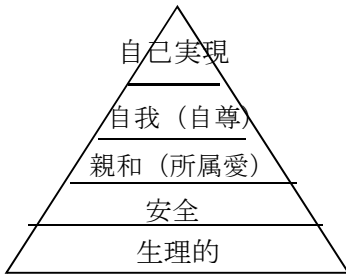
このようなモデルの上で、新しい理論知識を使えるか検証すれば、保守的な経営陣にも説得力のある提案ができるようになる。また一度作ったモデルの間違いの可能性は常に考慮し、常に進化することと、現実の前には、謙虚である姿勢が重要である。

人間のモデル化

仕事の関係では、人間の行動が関係する部分が多くある。このため人間の思考と行動を、モデル化することが必要である。経済学などでは、人間の行動を、動機（インセンティブ）に導かれて行うという風に記述している場合もあるが、この動機は教科書のように単純化できないことが多い。

例えば、人間の欲求を、マズローは図2に示す5段階に整理している。

そして、下位の欲求が満たされたのちに、上位の欲求が出現するとしている。



自分の才能を伸ばし、より良い成果を引き出してくれる。達成感を感じる仕事の実行。

自己の能力と仕事の成果を正しく評価してくれる。

組織内部で人間的な対立がなく一緒にいて楽しい。

他部門・上司から怒られず安心して仕事ができる。

首にならず生活が保障されている。生活の糧を得る。

図2 マズローの欲求階層図

しかし、現実には、これらの欲求は複合している。例えば、正社員を求めている就活においては、生活保障と生理的欲求から、正社員というステータスを求める自我や、自分の才能を今後伸ばしてくれるという自己実現の面まで求めている。給与においても、生活保障という面から、評価という自我の面まで広がっている。

このように現実の人間には、一つの動機での行動という、単純な図式で記述することは難しい。しかしながら、単純な動機—行動のモデルを、重ね合わせることで、個人の行動を説明できることもある。このように、人間のモデルには、複数の側面があることを考慮することが有効である。

このような複雑性を示すためには、人間のモデルには生きた人間の印象を持ち、想像力が働く余地を残すことも大切である。このような部分が、学問的な理論と違う。

このようにして、人間は複雑でわからないと投げ出すのではなく、常に仮説をもって考えることで、少しは人間に関しての理解も進むようになる。

特にビッグデータの活用等、色々な情報が使える場合でも、しっかりした仮説を、自分のモデル上で動かし検証することで、本当の説明を行うことができるようになる。このような能力こそ、総合職に求められ散るものだと思う。

以上